
現世と冥界、学生と死神

RYooFuu

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

現世と冥界、学生と死神

【Nコード】

N7725L

【作者名】

RYOOFUU

【あらすじ】

普通の高校生の少女だった主人公、笑美であったが、母が死神であつたことを知り、その運命と闘う物語。

序章

ここは、まだまだ冷たい風が通りぬける、如月の学校の屋上。
太陽と時計の短針は一番上にある。

丁度、昼休みの真っ最中だ。

周りでは学生たちが友人たちと会話しながら昼食を楽しんでいる。
そんな中に、フェンスの近くに二人の少女がいた。

彼女達もまた、昼食を食べているのだ。一人の少女は、黒髪をなびかせて、景色を見渡し、売店で買った焼そばパンを頬ばっている。

彼女の名前は明月笑美（あけづき えみ）。

横でフェンスにもたれ掛かって、クリームパンを食べているのは笑美の親友の日暮舞（ひぐれ まい）である。

笑美は一見、ただの学生のようなが、実は人間であって、人間でない存在なのだ・・・

人間と死神のハーフ

ぱつと見た感じはただの人間なのだが、彼女の母は、死神なのだ。

笑美が母の顔を初めて見たのはつい最近のことだった。

ついこの前までは、母は笑美が産まれて、すぐ病気で亡くなっていたと思っていたし、胸元に輝く銀の十字架のネックレスは形見だと思っていたのだが、十八歳の笑美の誕生日に、父である明月恵己（あけずき としき）にあることを告白された。

「実は、お前の母さんは死んではいない。だが、人間でもないんだ。

死神なんだ。」

その後に父は付け足すように嘘をついていて悪かったと謝った。しかし、笑美は腹をたたなかった。怒るというよりは母が死神でも、生きているならよかったと思った。そして、笑美はある感情を父にぶつけた。

「お母さんには会えるの？」

父は嬉しそうに頷いた。そうして、次の日の昼に自宅の近くにある雑木林の中の公園で会えることになった。

その公園は雑木林を丸く切り抜き、その真ん中にシンボルとなっている噴水がある。つまり、子供の遊び場というよりは、大人が散歩を楽しむという感じの公園である。

次の日、笑美はお昼より少し早く公園に行って噴水の近くのベンチに座って本を読んでいた。

三十分ほどした時だった。

木陰から紅の長髪に、深紅の瞳、年齢は二十代前半ぐらいの茶色のコートにGパンの美人の女性が現れる。

「笑美ちゃん。」

その女性は澄んだ声で笑美の名前を呼んだ。あまりに、咄嗟すぎて笑美は、

「貴方は・・・誰？」

と尋ねた。すると、その女性はいっこり笑って、

「私はコルキュラ。貴方の母よ。」

と優しく答える。

薄々勘付いてはいたが、まさか本当にそうだとは思ってなかったのだ、驚いて笑美は本を落としてしまった。

笑美の母と名乗る女性はその落ちた本を拾い、

「信じてくれる？」

と優しく呟いて本を手渡した。少しの静寂があり、笑美は一回浅くうなずいた。

そして、口を開いた。

「ねえ、本当にお母さんは本当に死神？」

コルキュラはクスツと笑って、

「そうよ。」

と答えた。笑美にとって、どうでもいいはずの質問だったはずなのに、何故か最初にでた言葉がこれだった。他にもっと聞きたい重要なことがあるはず

その刹那、コルキュラはふらついて、頭を抑えた。

「お、お母さん大丈夫？」

笑美が近づくと、コルキュラはふうーと溜め息をついて、

「うーん。久し振りの現世で、しかも昼だったのはまずかったかしら・・・」

と独り言を呟き、

「笑美ちゃん、ごめん。ちょっと疲れちゃったから、帰るね。」

と言ってくるつと来た道の方へ少しふらふらしながら歩きだした。

咄嗟に笑美は、

「お母さん、まだ色々聞きたいことが・・・」

と叫ぶと、コルキュラは振り返って、

「この公園の雑木林の奥にある、大きな切り株に、次の新月の夜に来て。お話の続きはまたその時にね。」

と言い、また歩き出した。

その時、春一番だろうか、強風が吹き、つい笑美は目を瞑ってしまった。

次に目を開いたときには、目の前に紅の髪は見えなくなっていた。

新月は2日後にやってきた。春は近づいてはいるのだが、まだ夜は寒い。笑美は藍色のジャンパーを着て、あの公園に向かった。玄関を出たのは十時だった。

この街は特に大きな会社やビル、ショッピングモールはないので、

これぐらいの時間になると、出歩いている人はほとんどいない。いるとするなら、憂鬱から開放されて帰宅中のサラリーマンぐらいである。

マンションから出ると、冷たいビルかぜが吹き下ろしてきた。頬にあたる風が痛いぐらい冷たい。

笑美はジャンパーのフードを被って歩き始めた。

人気がないせいだろうか、余計に寒く感じ、公園まで遠く感じる。街灯が付いてはいるがやや暗く寂しさをより一層強める。

少しすると、目の前に目的地の公園が見えてきた。公園は周りよりさらに暗く、雑木林が風で揺れている。

中に入ってみると、林はまるで生きているかのように不気味に揺れ、昼間は綺麗な噴水は、ライトアップしているが、人気がなく、逆に気味悪くなっている。

まだ、街灯がある噴水の周りはまだマシだが、しかしコルキュラは昼間でもあまり近づかない、雑木林の奥に來いと言ったのだ。切り株へはほとんど獣道に近い細い道がある。

笑美は途中までしか行ったことがなかったが、その先に切り株があるのは知っていた。

そもそも、その切り株はこの街ではなかなか有名で、樹齢は千年を越えているらしく、三十年ほど前に落雷により燃え、仕方なく切り倒されたらしい。妖精が羽休めする場所だとか、幽霊が集まる場所だとか、噂というか、都市伝説のようなものも広まっている。

そのせいか、近寄る人は昼夜関係なく、少ない。そんな場所にしかも、夜に行くなど肝試しにはかならなかった。

笑美は幽霊とか都市伝説などのオカルトなものは得意ではなかったが、母に会いたいという気持ち、体を前に進ませた。しかし切り株への細道に差し掛かったとき、流石に脚が竦んだ。だが、笑美は竦んだ脚を無理やりに前に進ませる。少し進むとほとんど何も見えなくなってきた。

視界に入るものは、木、木、木…

笑美は持つてきた懐中電灯を使って足元を照らして、早足で道をたどる。その時、風に揺られ落ちてきた木の葉が笑美の肩に当たった。刹那、笑美は声にもならない悲鳴を上げて全力疾走した。

するとすぐに、視界が開けた。それと同時に笑美は自分の足に足を引っかけられて、豪快に顔から転ける。

幸い、下が草原で怪我はなかった。

笑美が顔を上げると目の前には雑木林に囲まれている半径100mぐらい開けた広場、綺麗な星空、そして広場の丁度真ん中あたりに切り株があった。そこには、座っているような黒い人影が見えた。

笑美は立ち上がり、体を払い、引き寄せられるように、切り株へ歩き始めた。

近寄ってみると、クスクスと笑っているのが聞こえた。

「もー笑美ちゃん傑作よ」

黒いフードを脱ぎ、笑顔を見せたのはやはり、コルキュラだった。

体は、黒いマントで覆われている。

まるで、ロールプレイングゲーム R P G などに出てくる、黒魔道師のようだ。

「夜は苦手なのかしら？」

コルキュラはまだ笑っている。

笑美は顔を赤らめて頷く。正しくは”得意ではない”なのだろうが、あんなのを見られたなら、小さい抵抗は意味がないとわかっていたのだろう。それでも少しは抵抗しておきたかったのか、

「こんな所に呼ぶお母さんが悪いよ。」

とコルキュラに聞こえるか聞こえないかの小さな声で言う。

「仕方ないでしょ。私はここが好きなんだから。」

どうやら聞こえていたらしい。ちよつとツンとした口調でコルキュラが答える。

「こんな薄気味悪いところ、なんで好きなの？」

笑美は、怖いものが苦手というのを丸出しにした質問をする。

「えつとねえ…貴方のお父さん、恵己さんと出会った場所だからよ。」

「
体をもじもじさせてコルキュラは言う。笑美は何か地雷を踏んでしまった気がした。そして、顔を赤らめて、手で顔を覆い、キヤーとか言っているコルキュラに何を言うべきかとぼーっと見ていた。するとコルキュラは、あの頃はよかったなあとかき、一息ついて、
「立ち話もなんだし、笑美ちゃんも座りなさいよ。」

自分の座っている切り株の右側を手で叩いて、笑美を招く。

笑美は、ゆっくりコルキュラの横に座る。

「さて笑美ちゃん、聞きたいことって何？」

コルキュラは急に切り出してきた。

「え、えっと……お母さんはなんで今まで何処に行っていたの？」

これは笑美が一番聞きたいと思っていたことだ。

コルキュラは、

「冥界よ冥界。」

冥界、つまり死後の世界だ。まあ、コルキュラは死神なので特に不思議なことではないのだろう。

「じゃあ、お母さんは冥界で何をしてたの？」

疑問が次々にあふれていく。

「死神のお仕事よ。」

さらっとコルキュラは答える。

死神の仕事？

笑美のイメージでは、人に取り付いて死を招く、という感じがある。コルキュラはそんな事をしているのだろうか。

「お母さんは、人を殺すの？」

頭で考えていたら口にでてしまった。

「殺したことないわよ。無罪の人を殺したら閻魔王様にどんな処分を受けるか……」

なにか怖い経験を思い出したような口振りで答える。

「じゃあ、どんな仕事してるの？」

「そうねえ…死んでしまつて、冥界に上がってきた人を閻魔王様の所まで連れて行く。まあ簡単に言つと、冥界の観光ガイドさんってところかしら。」

イメージブレイク…。

笑美の脳内死神像は粉々になつて、消えてしまった。

「えっ？死神といたら死を招くんじゃないの？」

ふと、笑美は同じような質問をしてしまう。コルキュラはフフッと笑つて、

「それはかなり前の話よ。今、死神の仕事というとな…」

コルキュラが言うには、仕事は大きく分けて3つ。

一つは、自殺者を出来るだけ苦しめずに殺すこと。

もう一つは、コルキュラの仕事である、冥界に來た靈達を閻魔王の所まで案内すること。

そして、最後の一つは、現世、つまり今生きている世界に彷徨っている亡靈を冥界に送ること、の3つらしい。

本当の死神は、笑美のイメージから完全に離れていた。笑美はポカーンとなる。

ここでふと、笑美は一つ、気にかかったことがでてきた。

「お母さん、あのー…。」

笑美が聞こうとしたときに、コルキュラがムスツとした口調で、口を挟む。

「笑美ちゃん、質問しすぎー。お金、取るわよ。」

「え、あ、ごめんなさい。」

笑美が謝ると、冗談よ、言つて笑う。

「で、なに？」

コルキュラは、自分から話を止めておいて聞き返してきた。

「どうやってお父さんと会つたの？」

「それはね・・・私は昔、さっき言った中の現世で亡霊送りの仕事をしてたの。その時にここで出会ったのよ。」

コルキュラは微笑みながら言う。

笑美がへえーと呟く。すると、コルキュラが、

「笑美ちゃんあのね、実はお願いがあるんだけど・・・。」

と言う。笑美は何の疑いもなく、いいですよと答えた。

「あのー・・・死神の仕事、さっき言った中の亡霊を冥界に案内するってやつをね、笑美ちゃんにやってもらいたいなの。」

コルキュラが小声で言う。一拍の間の後、笑美は、

「え！？あの仕事を？私に？」

と叫んだ。コルキュラは、両手を合わせて、

「おねがい、笑美ちゃん。」

と頼みかけてくる。

「無理に決まってるじゃないですか。お母さんもさっきの見たでしよ？私、お化けとかそういうの苦手なんです！」

叫び声で返す。コルキュラはきょとんとして、

「あらー困ったわねえ・・・。もう閻魔王様のところに願書出してきちゃった。」

なんて勝手な人なんだろう。笑美はそう思い、呆れ、ため息をついた。

「とりあえず、何が何でも嫌です。断って下さい。」

呆れ声で、コルキュラに頼む。

「うーん・・・。残念ながらね笑美ちゃん。実は、死神の血をひいてる限りはこの仕事は義務なのよ。」

強制はしたくなかったんだけどねとコルキュラは付け足し言った。

笑美は、絶望で声も出ない。

その時コルキュラが耳元で小声で、

「給料は高いわよ」

と呟いた。その瞬間、笑美のスイッチが入った。

「い、いくらですか？」

ガバツと立ち上がった、コルキュラを見つめる。

笑美は、お金には目がないのだ。というより、お金がないのである。父は研究所で働いているので、給料が不定期、ある時はあったが、ここ最近、ほとんど皆無で、笑美が、コンビニに週三で働かないと、ヤバいぐらいだ。

「えーっとね…。レート式に変動するけど、今は大体、一魂1000円ってとこかしら。」

「一魂何時間で倒せるんですか？」

「慣れてきたら10分もかからないわよ。」

「や、やります！」

即答。笑美脳内金銭コンピュータがフルで起動し、損得を一瞬で計算したのだ。さっきまで、嫌がっていた人間には見えない。笑美の急な変わりように少々困惑しながらも、コルキュラは、腰のポケットラしきものから小さなキーホルダーを差し出した。形はL字型。多分、鎌の形だ。

「はい、笑美ちゃん。あなたの武器よ。デスサイズね。閻魔王様がルーレットで決めたんだから文句は無しね。」

そう言っ手渡した。

大きさは五センチぐらい。これでどうしろというのだろうか。

「これでどうすれば・・・」

笑美がそう言いかけた瞬間、コルキュラは目の色を変えて周りを見渡す。何処からでてきたのだろうか、手には変な曲剣を握っている。

「タイミング良く来たものね・・・」

コルキュラは呟く。笑美は全く何かわからない。

「え、何が来たんですか？あと、その剣は何ですか？」

ふと、尋ねてみる。コルキュラは目の色を変えず、こちらを見て、「この剣？私が閻魔王様にいただいた銃剣、バスターファルシオン。来たのは亡霊よ。」

笑美は身震いした。やるとは言ったもののやはり幽霊は怖い。この

際剣の件はどうでもよくなった。

コルキュラは小声で、来たと言つてそちらの方を見た。

つられて笑美もそちらを見る。林の中から半透明で青い鬼火玉、俗に言う火の玉がふわふわこちらに向かつてきていた。大きさは、サッカーボールぐらいだ。

笑美が幽霊を嫌いな最大の理由、それは“ハッキリ見える”のだ。

「なーんだ雑魚かぁ・・・。」

鬼火玉を見た瞬間にコルキュラは目の色を戻し、構えていた剣をおろす。そして笑美に向かって、

「そうねえ・・・。笑美ちゃん、初戦には丁度良い相手だから、戦つてみなさい。」

と言つ。笑美は後ずさりしながら、

「ど、どうやって戦えばいいんですか？」

と震える声で尋ねる。

「まず武器を大きくして、地面に刺して、結界を張る。それから普通に戦えばいいわ。」

「つて、まずどうやって武器を大きくするんですか？」

「力を込めて、大きくなるというイメージを念じればいいのよ。」

笑美は目を閉じ、言われたように、力を入れて、大きくなれ大きくなれと念じた。

すると、五センチ程度だった鎌が、2mぐらいの大きさになった。

しかし、とても軽い。力のない笑美でも片手で振り回せる程度だ。

「で、できました。次はどうすればいいんですか？」

「結界をはるのよ。」

「どうすれば、はれるんですか？」

コルキュラは、こうするのよと言つて、笑美が両手で握っている鎌を片手で押して、鎌の刃の部分を地面にざっくり刺させた。

「こうしてから”cloth the world”と唱えるのよ」

「え、あ、はい。わかりました」

笑美がそう唱えると、広場がすっぽりと収まるドーム型の黒い赤色の結界が出現した。結界の中は外より少しだけ明るい。

「さあ、行きなさい。」

笑美は、コルキュラに背中を押されて2、3歩前にでた。

普通に戦うと言われても、普通がわからないので、どうしていいかわからず、ただガタガタと体を震わして、その場に立っていることしかできなかった。

敵はもう、すぐそこだ。

「ど、ど、どうすればいいんですかぁー。」

震えた声でコルキュラに叫ぶ。

「とりあえずその武器で攻撃しなさいよ。」

さらつと返される。小さく、はいと返事をした時、敵が攻撃のどく範囲まで迫ってきた。

笑美は、やけくそに目を瞑って鎌を振るった。

斬れた感覚が手に伝わってきた。

しかしその刹那、腹筋あたりに強い波動がきた。激痛がはしる。

笑美は後ろに吹き飛び、地面に落ち、背中を打った。幸い、地面がやわらかかったので、あまり痛くはなかった。何が起こったのかまだ理解できない。

「笑美ちゃん、大丈夫ー?」

とコルキュラが心配そうに叫ぶ。

目を見開くと、鬼火玉はまだ浮いている。どうやら倒せてなく、反撃されたらしい。

また少しずつ近づいてきている。

ふと、鬼火玉の中に野球ボールぐらいの赤く丸い物体が見えた。

弱点だろうか・・・

しかし、考えている余地はなかった。もう攻撃の間合いに敵はいる。何も考えず、その赤く丸い物体めがけて鎌を振り下ろす。

さつきより斬れた感覚が大きい。赤い物体が真つ二つに斬れたのが見えた。

すると、鬼火玉は少しずつ薄くなって、遂に消えてしまった。そして、消えたと同時に、その場所にふわふわと浮く、金色に輝く小さな球体が出現した。

その球体は、その場でふわふわ浮いている。攻撃もしてこないようだ。

それを少し離れて見ていたコルキュラは曇った顔で、

「何で二回斬っただけで片付いたの・・・？まさか・・・」

そう呟き、笑美の方に向かっていった。そうして、笑美の肩に手をおき、

「よくできました。」

と微笑んで語りかけた。笑美は、そう言われた瞬間に体中の力が抜け地面にぺたつと座り込んだ。

「あ、あの金色の火の玉は何なんですか・・・？」

「あああれね。あれは“冥行霊”よ。こっちの世界から冥界に送りやすい姿。」

笑美がへえーと頷いているときに、コルキュラは持っていた鞆に手を入れて、何かを取り出した。

「はい、笑美ちゃん。これは私からの誕生日プレゼント。」

につこり笑って、笑美に黒くて、長方形で、手のひらサイズの物を手渡す。

それは、携帯電話。

笑美は金銭面で手が出せず、買えぬままにいた。

ここは母からの誕生日プレゼントを素直に喜びたかったが、

「携帯くれたのは嬉しいんだけど・・・月々の料金払ってたら、ご飯食べれなくなってしまう。」

そう言った途端、コルキュラは吹き出して笑った。

「はははっ。そんなにギリギリなの笑美ちゃん？でもまあ安心して。料金は私が払ったげるから。」

笑美はふうと胸をなで下ろした。

それを見ながら、まだ半笑いなコルキュラが、
「まあ料金はどうでもよくて、この携帯はね、冥界の携帯なの。正確に言うと、冥界とこっちを繋ぐ事のできる代物。死神の必需品ってとこね。勿論、普通に笑美ちゃんの友達のアドレスを登録すれば、普通にメールも電話もできるし、冥界にいる私にも同じことができるのよ。」

と携帯の説明する。笑美はうなずきながら、コルキュラの言っている事聞く。

「あと、一番重要なのは、この携帯を使って、あの冥行霊を冥界に送る事が出来るのよ。」

「どうするんですか？」

「こうするのよ」

コルキュラは携帯の番号を押して、どこかに電話を掛け始めた。数秒後、相手がでた。

「あゝコルキュラよ。境界開いてくれる？」

そう相手に伝え、コルキュラは携帯の画面を冥行霊の方に向けた。すると、冥行霊が画面に掃除機に吸い取られるように、吸い込まれていった。

携帯をボタンと閉めて、

「これで仕事完了。これから笑美ちゃんが霊を倒した時は、私に電話を掛けてきて。そうしたら、こんな感じに、こっちと冥界の境界を開くから。」

「わかりました。で、母さんのアドレスは？」

「登録済みよ。」

ニコツと笑ってコルキュラは話した。

「じゃあ、頑張ってるね。私も冥界での仕事があるからそろそろ帰るわね。」

「あ、はい。わかりました。お母さんもお仕事がんばって。」

「またどこかでね。」

別れのあいさつをすると、コルキュラは、着ていた黒いマントとフードを残して、手品のように消えた。

笑美は、そのマントとフードを持って帰ろうと、持ち上げてみると中から一枚の手紙がひらひらと地面に落ちた。その手紙には、

『笑美ちゃんへ　このマントとフードは、もう一個の誕生日プレゼントとして、受け取っておいて。あと、仕事をするにあたって一つ、いい情報を与えておくわ。それは、あなたの同級生の中に“日暮　舞”って子がいるでしょ。その子もあなたと同じ死神の血を受け継いでいる子だから、きっと協力してくれると思うわ。仲良くやんなさい。最後にこのマントとフードは私のおさがりだけど、対霊攻撃対策がほどこしてあるから、戦闘で役に立つわ。戦いのときには身につけてね。』

手紙には可愛らしい字でそう書いてあった。

手紙の中に出てきた“日暮　舞”は私の古くからの親友だ。まさか舞も死神だったなんて・・・と呟きながら、公園を後にした。

そして今日にいたる。

「どうしたんだ？あさつての方向を向いて。」

ボーンとしていたらしい。舞の声でハッとした。

「い、いや。何でもないの。」

「もうチャイムなっちまうぜ。早くその焼きそばパン食っちまいな。」

笑美は、残りの焼きそばパンを頬張って、屋上から教室に向かう。

そう、私たちは高校生でもあるのだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7725/>

現世と冥界、学生と死神

2010年10月10日19時12分発行